論　文 ニダバ (*Nidaba*) 40(2011), 20-28

トルコ語・日本語における外来語をめぐる意識に関する対照研究

Levent TOKSOZ

1. はじめに

トルコ語においても日本語においても近年「外来語の氾濫」ということがよく話題にのぼり、両国では外来語の増加に歯止めをかけるために分かりにくい外来語の言い換えの提案が行われている（国立国語研究所（2006), Ercilasun (1998)等)。このような言語政策を取る前に、国民の外来語に対する意識を把握すべきである。

日本では外来語意識に関する調査が頻繁に行われ、日本語における外来語の現状はどのように意識されているか、外来語を使う動機、外来語使用の功罪意識等が検討されている（文化庁（2002), 国立国語研究所（2006)等）。これらの調査から、特に若い世代が外来語に肯定的な態度を示していることが指摘されている。国立国語研究所(2006)では, 今以上に外来語が増えることをどう思うかが尋ねられ, 30 代以下では「好ましい」という回答が過半数を占めている。また、日本語を対象とする研究でも日本人大学生は、韓国人大学生よりは外来語の流入を歓迎する傾向があることが指摘されている（梁（2005))。このように話者の外来語の流入に関する意識を本研究では「外来語受容意識」と呼ぶ。しかし、日本人大学生誰もが外来語に同様な反応を示すとは限らない。海上・高井（2006)では、日本語に対する「誇り」の認識が高い大学生は、それが低い大学生に比べ、カタカナ語によってもたらされる知的印象効果について魅力を認知しない傾向が示唆されている。そこで、筆者は「誇り」を含めた、話者の母語に覚える満足感が、外来語の受容意識に影響を与えている可能性があるのではないかと考えた。

トルコでも大学生の外来語意識を扱う研究が行われ、トルコ人は外来語に抵抗感を感じていることが指摘されている（Osam（1997))。トルコ人大学生を対象に行われた質問紙調査の結果、外来語について「トルコ語を破壊する」と回答した学生は 90%を超え、肯定的な立場を示す学生は 7%に留まっている(König, Somuncu（1993))。

このように、先行研究の結果からはトルコ人大学生は外来語受容意識が低く、日本人大学生は外来語受容意識が高いことが浮かび上がってくる。本研究では、両国大学生の母語に対する満足度をも視野に入れ、以下のような仮説を立てた。

仮説 1：トルコ人大学生は、日本人大学生よりも外来語の受容意識が低く、かつ母語に対する満足度が高い。

仮説 2：トルコでは外来語使用の良い点を意識している大学生は日本よりも少なく、悪い点を意識している大学生が日本よりも多い。

本研究では、仮説 1 と仮説 2 を検討することによって、トルコ語と日本語における外来語をめぐる意識を比較することが目的である。

2. 方法

2.1. 調査協力者

本研究では、トルコ共和国のチャナッカレ大学の学生 52 名（男性 33 名，女性 19 名，平均年齢 21 歳）と日本の広島大学の学生 51 名（男性 27 名，女性 24 名，平均年齢 21 歳）の合計 103 名を対象とした質問紙調査を実施した。

2.2. 質問紙の構成

質問紙の項目を作成する際に Osam(1997)、国立国語研究所（2007）を参考にした。質問紙は 1. “外来語受容意識に関するもの”、2. “母語満足度に関するもの”、3. “外来語使用の功罪意識に関するもの”、4. “外来語自己意識に関するもの”、5. “外来語と本来語のイメージに関するもの” の 5 つのセクションから成り立っている. 本研究では、1，2 と 3 を中心に述べる。

1. “外来語受容意識に関するもの” では、被調査者が外来語の流入に示す態度を探り、“外来語が母語に流入することに関して好ましく思うか”、“借用の必要性を感じているか” を尋ねた。

2. “母語満足度” では、トルコ人と日本人の学生が母語の本来語に対してどのように評価しているかを探り、“日本語（トルコ語）は外来語なしで全てのコミュニケーションのニーズに応えられるか”、“日本語（トルコ語）の語彙や表現を豊かに思うか”、“日本語（トルコ語）は本来語だけでコミュニケーションに必要な新語を造くることができると思うか” を尋ねた。

3. “外来語使用の功罪意識に関するもの” では、外来語を使うことの良い点と悪い点はどのように評価されているかを話題にした。外来語使用の良い点としては、“新しさを感じさせる”、“しゃれた感じを表せる”、“知的な感じを表せる”、“これまでになかった物事や考え方を表せる”、“話が通じやすくて便利”、“同じ意味でこれまで使っていた言葉のマイナスイメージをなくする、あるいは和らげる” の 6 項目、外来語使用の悪い点としては、“母語の伝統は破壊される”、“軽薄な感じを与える”、“相手によって話が通じなくなる”、“誤解や意味の取り違いが起こる”、“人を煙に巻いたり、ごまかしたりするために使われる”、

“読み方が難しくて覚えにくい”、“正しい英語を学ぶ妨げになる”の7項目を使用した。

このうち、1.“外来語受容意識に関するもの”と2.“母語満足度に関するもの”では、1「全くそう思いません」2「あまりそう思いません」3「どちらとも言えません」4「ややそう思います」5「まったくそう思います」の5段階で評価してもらった。そして3.“外来語使用の功罪意識に関するもの”では、評価項目方式で、選択肢から複数回答を求めた。

3. 調査結果と考察

3.1. 外来語受容意識について

トルコ人と日本人大学生の外来語受容意識を測定する2項目の平均値を図1で示す。

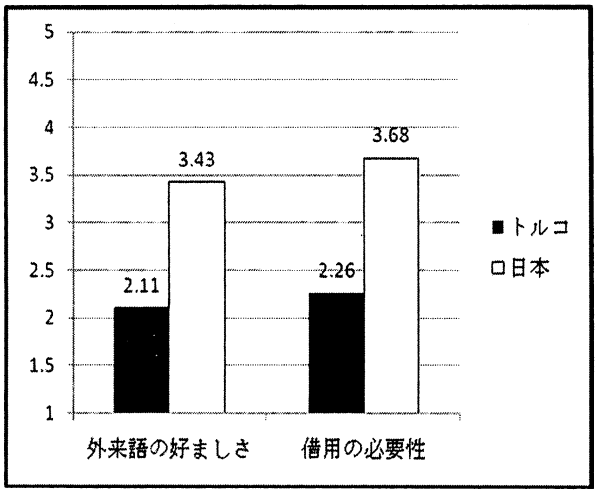

図1　トルコ人・日本人大学生の外来語受容意識に関する評価

図1からも分かるように、外来語受容意識を測定する2項目においてトルコ人大学生の平均値が低い。トルコ人の大学生は、母語に外来語が流入することを好ましく思っておらず、かつ、外来語借用の必要性も感じていないと言える。外来語の受容に抵抗感が持たれていることが分かる。それに対して、日本人は比較的に、外来語の流入を好ましく思い、かつ、外来語借用の必要性をも感じている。トルコ人大学生は日本人よりも、外来語の受容に否定的な立場を取っているようである。

そこで、統計的に、トルコと日本で外来語受容に関する評価に有意差が認められるか否かを検証するために、条件別の平均値（図1参照）について、言語（2）×外来語受容意識（2）の分散分析を実施した。その結果、言語の主効果が有意であり（$F(1, 101)=61.94$, $p<.001$）、トルコ人の大学生は日本人大学生よりも外来語受容に関する評価が低いことが分かった。

3. 2. 母語満足度について

トルコ人と日本人の大学生の“母語満足度”を測定する 3 項目の平均値を表すのは図 2 である。

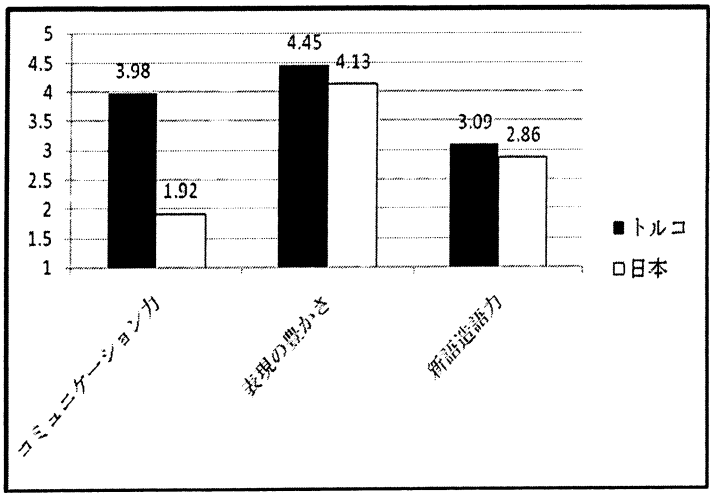

図２　トルコ人・日本人大学生の母語満足度に関する評価

各項目においてトルコ人の平均値は日本人を上回っているが、特に“外来語なしで自分の母語は全てのコミュニケーションのニーズに応えられるか(コミュニケーション力)”という項目では、両国の差は一目瞭然である。トルコの大学生は、3. 98 の平均値で、“トルコ語は本来語だけでコミュニケーションを成り立たせることができる”と評価しているのに対して、日本人の平均値は、1. 92 に留まり、“日本語は本来語だけで全てのコミュニケーションのニーズには応えられない”と評価している。

そして、両国の大学生とも、母語の本来語については豊かだと思い、本来語の造語力に関してはほぼ中立的な立場を取っていることが読み取れる。これらの項目では両国での差は非常に小さい。日本人の大学生が、日本語の本来語をコミュニケーションの面で不足していると思いつつも、語彙や表現の面で非常に豊かだと判断した理由として 2 つの解釈がありえる。一つ目は、“日本語のコミュニケーション力”と“語彙や表現の豊かさ”とは別々の次元と見なされているという解釈である。例えば、“コミュニケーションする上で外来語がないと困るが、それとは別の面で、日本語の本来語は擬態語・擬音語等が豊かで、微妙なニュアンスを表すことが出来る”というような考え方である。そして、もう一つの可能性としては、コミュニケーションのために外来語は欠かせないと思われるが、学校教育等の影響によって、“日本語”と“豊か”というイメージが結びついて、被調査者がステレオタイプ的に判断したことが考えられる。

そこで、また統計的に、トルコと日本で、母語満足度に関する評価に有意差が認められ

るかを検証するために、条件別の平均値（図２参照）について、言語（2）×外来語母語満足度（3）の分散分析を実施した。その結果、言語の主効果が有意であり（F(1, 101)=30.22, p<.001)、また、言語と母語満足の間の交互作用が有意であった(F(2, 202)=30.48, p<.001)。そこで、単純主効果の検定を行った結果、“外来語なしで、自分の母語は全てのコミュニケーションのニーズに応えられる（コミュニケーション力)”という項目のみにおいて、トルコと日本の間で有意差が見られた（F(1, 303)=88.02, p<.001）。トルコ人の大学生は日本人の大学生よりも自分の言語のコミュニケーション力を高く評価している。

3.3. 外来語使用の功罪意識について

ここでは、トルコ人と日本人の大学生に、外来語使用の良い点、そして、悪い点がどのように評価されているかについて述べる。

3.3.1. 外来語使用の良い点

トルコ人大学生と日本人大学生が外来語使用の良い点としてあげた項目の比率は図３の通りである。

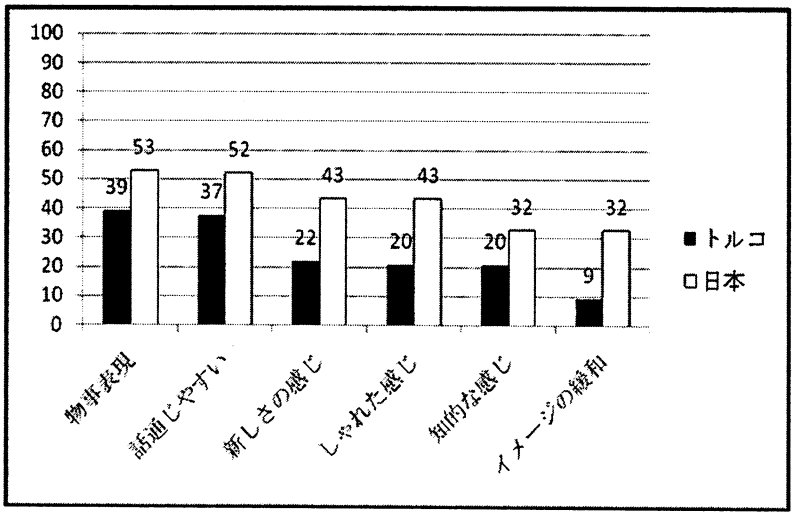

図３　トルコ人・日本人大学生の外来語の良い点に関する評価

図３からは、まず、トルコにおいても日本においても、外来語使用の良い点としてあげられた項目の順序は同様であることが分かる。両国において「これまでになかった事物や考え方を表せる」が最も多く、「話が通じやすくて便利」、「新しさの感じ」、「しゃれた感じ」、「知的な感じ」、「イメージの緩和」と続いている。この結果から、両国の大学生は外来語使用の良い点の順序に関しては似たような意識を持っているように思われる。

相澤（2007）によれば、「話が通じやすく便利である」、「これまでになかった物事や考え方を表せる」の二項目は「専門語」としての外来語（「専門外来語」）の特徴であり、外来語の効率性、定義の正確性、あるいは表現上の的確性と関わっているとされている。一方、「新しさの感じ」、「しゃれた感じ」、「知的な感じ」、「ことばの暗いイメージの緩和」は「職業外来語」の特徴であり、受け手を情緒的、感覚的に刺激することによって効果を上げるものであると述べられている。

したがって、両国の大学生とも外来語使用の良い点として、まず第一に「専門外来語」としての外来語、次に「職業外来語」としての外来語の利点を評価していることになる。

また、図3から、どの項目においてもトルコでは外来語使用の良い点を意識する大学生が日本よりも少ないことが読み取れる。この差は、「専門外来語」では15%程度であり、「職業外来語」では、「知的な感じ」以外のすべての項目では 20%を超えている。前者は、外来語の基本的な機能であり、トルコ人にも良い点としてある程度認められている。しかし後者に関しては、評価が低く、外来語の受容に否定的なトルコ人大学生の意識が反映されている結果になっている。

3.3.2. 外来語使用の悪い点

トルコ人大学生と日本人大学生が外来語使用の悪い点としてあげた項目の比率を図4で示す。

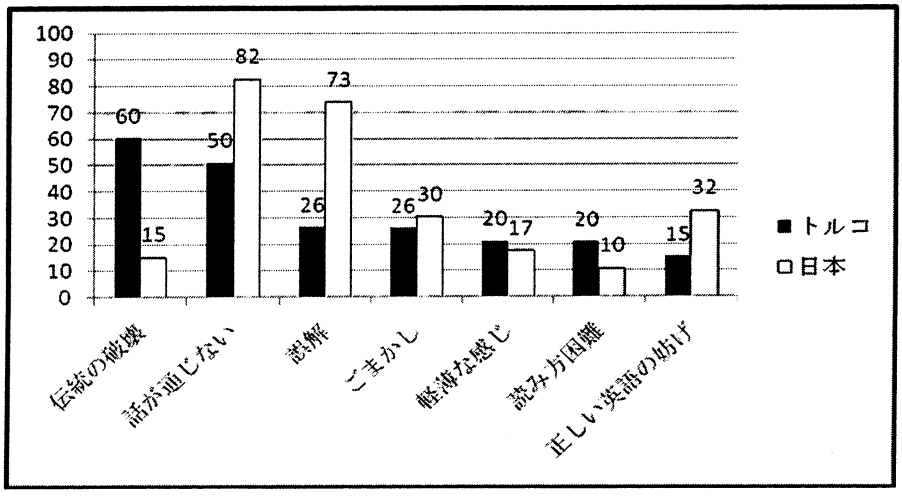

図4 トルコ人・日本人大学生の外来語の悪い点に関する評価

トルコで外来語使用の悪い点として最も多く選択されたのは、「トルコ語の伝統が破壊される」という項目であり、この解答は 60%に達している。一方、日本ではこの項目は、6番目に挙げられており、15%に留まっている。次にトルコでよく挙げられた項目は、「相手

によって話が通じなくなる」であり、コミュニケーションの問題も意識されている。一方、日本人は、この外来語使用の起こすコミュニケーションの問題こそが、外来語を使う際の第一の悪い点であると見なしているようである。

相澤（2007）によれば「相手によって話が通じなくなる」、「誤解や意味の取り違いが起こる」の二項目は外来語の伝達機能と関わりが強い。その一方「言語の伝統が破壊される」には、その言語の言語文化が崩されていくという危機感が含まれている。前者を重く見るのは「機能重視」、後者を重くみるのは「伝統重視」の立場と指摘している。

トルコ人の大学生は外来語をある意味で言語汚染の元と考え、何よりもトルコ語の純粋さを損なうのではないかと心配しており、第一に「伝統重視」の立場を取っている。ただし、それだけではなく「相手によって話が通じなくなる」という項目も重視されており(50%)、「機能重視」の立場も見られる。一方、日本人大学生ではコミュニケーション問題を第一に意識し、「機能重視」の立場を取っている。この結果は、国立国語研究所（2007)、König, Somuncu (1993)の結果と合致するものである。ただし、König, Somuncu では 90%に達していた「トルコ語を破壊する」という回答は、本調査では 60%に減少しているので、トルコ人大学生の「伝統重視」の意識が弱まってきた可能性は否定できない。

4. 総合考察

本研究では、トルコ語と日本語における外来語意識について考察した。具体的には、“外来受容意識”、“母語に関する満足度”、“外来語使用の功罪意識”、の 3 点に関して探り、以下の仮説を検討した。

仮説 1：トルコ人大学生は、日本人大学生よりも外来語の受容意識が低く、かつ母語に対する満足度が高い。

仮説 2：トルコでは外来語使用の良い点を意識している大学生は日本よりも少なく、悪い点を意識している大学生が日本よりも多い。

仮説 1 に関しては、“外来語受容意識” について、トルコ人は母語への他言語の流入を好ましく思っておらず、外来語借用の必要性も感じていない。一方、日本人はトルコ人に比べ、他言語の流入を好ましく思い、かつ、借用の必要性も感じていた。そこで、仮説 1 の前半が立証された。そして、“母語満足度” については、“母語は外来語なしで全てのコミュニケーションのニーズに応えられる” という項目においてトルコ人の母語満足度が有意に高かった。そこで、仮説の後半もある程度立証された。

次に、仮説 2 に関して、外来語使用の良い点については、両国の評価項目の順序は同様であったが、どの項目においても、トルコ人の比率は日本人より低かった。したがって、仮説 2 の前半は立証されたことになる。一方、外来語使用の悪い点については、母語の伝

統の破壊のような「伝統重視」の項目では、トルコ人の比率は日本人より高かったが、「相手によって話が通じなくなる」、「誤解や意味の取り違いが起こる」のような「機能重視」の項目では、日本人の方の比率が高かった。トルコ人は日本人より外来語の流入に否定的だからといって、外来語使用のどの悪い点にも敏感に反応するのではなく、両国の学生は自分のより関心のある危険性を問題視にしていることが分かる。したがって、どちらかが一方だけが他方より外来語使用の悪い点を意識しているわけではないので、仮説2の後半は立証されていないと言えよう。

それでは、なぜ、トルコ人大学生は外来語受容意識が低く、「伝統重視」的な立場を見せているのに対して、日本人大学生は外来語受容意識が高く、「機能重視」的な立場を見せているのだろうか。この背景には両国の大学生の、“母語”と“アイデンティティ”の関連づけ、そして外来語表記の実態が関係していると考えられる。

まず、“母語”と“アイデンティティ”の関連付けは、トルコ人大学生の方がより強く意識していると思われる。トルコの場合、トルコ共和国が設立された5年後に言語の表記に関してアラビア文字からラテン文字への文字改革が行われた歴史がある（1928年8月1日)。その後さらに、1932年7月12日に言語革命が行われ、オスマン帝国時代にイスラムの影響で定着していたアラビア語やペルシア語起源の語彙の代わりに、アナトリアをはじめ、トルコの地で古代から使われてきたトルコ語の語彙が再び使われるようになった（Tekmen (2009 : 311))。言語革命の指導者でもあるアタテュルク(Mustafa Kemal Atatürk(1881-1938))による“母語”と“アイデンティティ”の強いつながりに関する教えが現在もあらゆる教育による機関で生徒たちに教えられつづけている。一方、日本人大学生の“母語”と“アイデンティティ”の関連付けに対する意識はトルコ人よりも低いと思われる。真田（2001 : 169）は、日本では母語によるアイデンティティの重要さを概念的には理解しているが、現実の問題として自ら肌で感じることはあまりなく、付和雷同型で、かつ自己文化中心主義者が多いように思われると述べている。

トルコ人大学生は日本人大学生よりも外来語に否定的であるもう一つの原因として,外来語の表記が考えられる。トルコ語の場合、外来語は本来語と同様にラテン文字で表記され、表記上では区別されていない。ある語が外来語であるか否かは、母音調和に反しているか否か等のように、語の響きの特徴から予測するしかない。その一方で、日本語では基本的に、外来語には「カタカナ」という表記が使用され、本来語と区別されている。即ち、ある語が外来語であるか否かは表記から理解される。そこで、日本人大学生が外来語に肯定的である背景に、外来語がいくら流入されても、カタカナという枠組みで収まるという意識があるかもしれない。

このように、トルコ人大学生が日本人大学生よりも外来語に否定的である背景には、“母語”と“アイデンティティ”の関連付け、および外来語表記の実態が考えられる。

5. おわりに

本研究では、トルコ語と日本語における外来語をめぐる意識について考察を行った。それぞれの言語の特徴を知る上で、ひとつの知見を示唆できたのではないかと考える。しかし、当初予定していた両国における外来語に対する意識の相違を探ることはできたが、この意識の違いが個々の外来語から受けるイメージにどの程度反映されているかについては検討していない。今後は、両国において類義の本来語と共に使用される外来語に注目し、これらの外来語の与えるイメージについても調査・分析を行う予定である。

付記：本研究は筆者が 2009 年に広島大学文学部研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。

参考文献

相澤正夫（2007）「外来語の現代に対する意識」『公共媒体の外来語―「外来語言い換え提案を支える調査研究」―』（国立国語研究所報告 126）<htpp://www. ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/report126.html>

海上智明・高井次郎（2006）「言語スタイルによってもたらされる“知的印象”の構造」『日本認知心理学会大会第 4 回発表論文集』29.

国立国語研究所「外来語」委員会編（2006）『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き―』ぎょうせい

真田信治（2006）『社会言語学の展望』166 くろしお出版

文化庁（2002）『国語に関する世論調査』（世論調査報告書）大蔵省印刷局

ERCİLASUN,Ahmet Bican (1998) *Yabanci Kelimelere Karşılıklar*,Türk Dil Kurumu Yayınları, Ankara

KÖNİG, Güray , Somuncu, İnci (1993) Üniversite Öğrencilerinin Anadillerine ve Yabancı Dillere İlişkin Tutumları Üzerine Toplumdilbilimsel bir Araştırma, *VII. Dilbilim Kurultayı Bildirileri*

OSAM, Necdet (1997) *The Attitude of Turkish People Towards the Use of Foreign Words in a Turkish Context,* Hacettepe University, Institute of Social Science

TEKMEN, Ayşe Nur (2009) 「トルコ語と日本語における待遇表現の実態」『社会言語科学会第 23 回大会発表論文集』311-314.